

## ひふみの懺悔

——私たち人間は、全てを知ったような顔をしながらも、その実、ほとんど何もわかっていないということは、これまでの人類が証明しているかぎりである。一〇〇〇年どころか、一〇〇年前、一〇年前、あるいはほんの二、三年前におこった出来事ですら、人類の歴史という奴は、たやすく真実を厚いベールで隠してしまい、見えなくしてしまうものである。繰り返しになるかも知れないが、人類の歴史という奴は、嘘や偽り、そして秘密が多い。いや、謎だらけというべきか。私たちがよく知る歴史でさえ、日々、修正と修復が繰り返され、かつて「正しい」と教えられてきた物事が、いつの間にか「嘘」や「偽り」にとって変わられることが一切ではないからだ。特定の人物の肖像画が別人とされたり、偉大な功績が実はそうではなかったり、あったとされる出来事が実は無かったことが判明したり、それまで大々的に取り上げられていた人物がいつの間にか書籍から削除されていたり、年代や年号がまったく別の年数や日付に変わっていたりすることは、本当によくあることなのだ。恐ろしく迷惑極まりないことではあるが、歴史が変更されたり、改変されたりすることは、決して珍しいことではないのである。

ゆえに「真実の歴史」を探求するという行為は恐ろしいほどの困難を極める。特に、遠い昔——過去へと遡るほど、真実は歪められ、混濁し、それはまるで墨汁が混じった真水のような

状態になってしまい、分離させ、取り出すことが不可能な状態になってしまう。

それでも、ある種の痕跡を辿っていくことで、その片鱗を掴むことは可能だと私は考えている。そしてそれこそが考古学なのだと信奉してやまないのだ。

エジプト、黄河、インダス、メソポタミア——いわゆる四大文明の存在を知らない者は少ないだろう。よほど無知な者でもない限り、一度は聞いたことがあるはずだ。かつてその四つの文明こそが、人類発祥の文明だとされた巨大文明のことである。しかし、それはかつての認識であり、現代では異なる。長い人類史において、文明は、四つどころか、大小合わせれば一〇〇——もしかしたらもっとあるかも知れないが——を軽く超えるとされており、各地にその優れた痕跡を残している。それはこの日本とて例外ではないのだ。

学問の場において、日本の文化は大陸から到来したことが始まりだとされている。確かにその通りである。原始的な採取・狩猟文化から、一定の収穫が見込める農耕文化へと発展した理由は、ひとえに大陸から渡来した人々の功績によるところが大きい。当時の日本の数世代先をゆく中国という存在があったからこそ、日本は多くを学ぶことができ、発達・発展し、縄文、弥生、飛鳥、奈良——と時代を重ねて前へと進むことができたのである。これは歴史的な事実である。

しかしながら、ここでひとつの疑問が生じる。大陸から文明が渡来する前、日本には数十万年も前から人が住んでいたとい

うのに、独自の文化や文明がなぜ築けなかったのか、ということだ。これは日本史のみならず、世界史全体にもいえることで、人類は、数百万年も前から存在していたというのに、なぜ長きに渡って進化せず、まるで猿のような暮らしを続けていたのだろうか。そして、なぜ突然にも、ある時——ある時代を境にして、まるで花が開いたかのごとく、文明を発展させはじめたのだろうか。

人類が急速な進化を始めるそれまで、我々の祖先はいつたい何をしていただろうか。もちろん、それまで地球を覆っていた氷河期が終わりを迎えたことにより、人類が新たな進化の段階に突入したのだ——という意見があることは承知している。しかし、同時に、それだけでは説明がつかないという意見があることも同時に承知しておいてもらいたい。氷河期と聞けば、まるでかつてあったスノーボールアースのように、地球全体が氷に閉ざされた世界を想像するかも知れないが、実際の所は、現代の平均気温との差は、たったの数度程度でしかない。温暖な場所も、もちろんあったのだ。

前にも述べたかも知れないが、私たち人間は、知っているように何も知らず、歴史の真実という奴は証明することが難しいのだ。ゆえに、あえて結論から述べるならば、今の文明社会の礎となる文明が発達する前、ここ日本には——いや、世界には、いまよりも遥かに優れた文明が存在していたことは、もはや疑う余地のないことである。私は日本のみならず、世界各地の遺跡を巡ってそのことを調査し、遺物を丹念に調べあげ、そう結

論付けた。

その文明は超常の文明であつた。この星から何億光年も離れた場所に存在する「神」と交信し、次元を隔てて存在する別世界とも交流を持ち、数々の超常の力を身につけ、人間とは異なる種族を持ち、言葉ではとても表現できないような社会構造を築き上げた文明であつた。私はこのことを、長年の研究の末に突き止めた。

そして私はこの文明のことを「名も無き文明」と呼ぶことにした……。

＊

――以上が、私が愛読する神埼庄三郎著「未知なる文明を求めて」より抜粋した文章の引用である。私は彼の主張に深い感銘を受けた。なぜならば、私は彼とほとんど同じ結論に到達した数少ない人間だったからである。庄三郎氏は大学にて教授の職を持ち、数々の功績を上げながらも、先の著書の内容を公言してはばからなかったため、「異端」のレッテルを貼られ、今日においてはその名前さえ口にされないほど酷い扱いを受けるにいたっている。

私は一度、彼に会って話がしたいと思つたが、庄三郎氏は五年前から行方不明となつており、その願いを叶えることはできなかった。そのことを知った時は、もっと早く、彼の本に出会つていればと強く思つたほどである。

しかし、大学を訪れた時、彼の息子で助教授を務める神埼鳴海氏とは会うことができた。噂によると、彼もまた「名も無き文明」を調べているということだったので、彼と会う直前、私の心はとても躍っていた。

だが、いざ彼と会ってみると、酷い落胆を禁じえなかった。

鳴海氏は言ったのだ。

「父の研究は、まったく無意味で無駄な代物でした。父の研究は、全てが父の妄想によるもので、机上の空論でしかありませんでした。ゆえに、私はもう、そのことについては関わらないことにしたのです」

そう前置きした上で、彼は、父親が残した資料は全て破棄したと告げたのである。

私は落胆すると同時に憤慨し、次いで怒り狂って彼の前から辞去した。ただ、私は彼の言葉が真実だとは思わず、むしろ何かを隠しているような気がしたので、資料を破棄したと聞いて感情が押さえられなかったのである。

もはや自分で探すしかないと考えた私は、そのまま大学の図書館を訪れた。庄三郎氏の資料が何か残っていないかと思っただ。この目論見はあたった。図書館には、庄三郎氏が大学側に提出したレポートが残されていたのである。

レポートの閲覧を求めた時、対応した司書は、あからさまな顔をして、

「……あの人には関わりをもたない方がいい」  
と言っていたような気がしたが、逸る気持ちを抑えきれなく

なっていた私はすでに聞く耳を持っていなかった。

レポートには恐るべき内容が記されていた。なんと、そのレポートには、この世界とは違う次元に存在する別世界と交信する方法が事細か詳細に記載されていたのである。庄三郎氏の研究によると、「名も無き文明」は別世界とも交流を持っていたというから、確かに別世界の存在を確認することができれば、それは世紀の大発見であると同時に、庄三郎氏の主張の正しさを証明すること——すなわち「名も無き文明」が確かに存在していたことを証明することにも繋がるわけだ。

レポートによると、庄三郎氏は、この方法を「名も無き文明」の遺物や遺産を集めることで知ったと書かれていたが、あまりにも複雑かつ難しいやり方であるため、自ら試すことは断念したようであった。

確かに、レポートに記載されている内容が真実であるとするならば、別世界と交信を持つことは困難を極める。時期、場所、必要な祭事の道具、そして「材料」——それらを正しく合わせなければ、別世界へと通じる「扉」を開くことはできないのだという。その困難さゆえ、庄三郎氏は別世界と交信することを諦め、未だ世界のどこにも見つからない「名も無き文明」の遺跡を探しあてることによってその存在を立証しようとしたようである。

レポートは次のような言葉で締めくくられていた。

「——もし、この方法を試す者がいたならば、私はその者を心から褒め称え、あらん限りの賞賛を浴びせたいと思う」

この言葉を目にして私は決意した。必ずや次元の扉を開け放ち、別世界の存在を確認することを。庄三郎氏の意味を継ぎ、「名も無き文明」の存在を立証するのはこの私なのだ……。

――以上が、行方不明となった池田ひふみが残した手記の内容である。この後、彼が本当に別世界を見つけたかどうかは判然としない。彼のことを知る多くの者によると、この手記を書いた時点で彼は情緒的に不安定になっており、家族に伴われて幾度となく精神科を受診している。また、彼には普段から妄想癖があつて、時おり、夢とも現実とも区別がつかなくなることであり、その時は訳のわからない言葉でまくし立てることが何度となくあつたそうだ。

医者からは何種類もの精神薬を出されており、その中には覚醒剤の親戚のような作用を持つ薬も含まれていた。

ゆえに、池田ひふみが行方不明になったと聞いた時、彼のことを知る人物は、どこかで突発的に自殺でもしたのだろう、と思つて気にも止めなかった。

しかし、池田ひふみが行方不明になる直前、彼から最後に連絡を受け取った神埼鳴海だけはそうは思っていなかった。

行方不明になる直前、ひふみは言っていたのだ。震えた声で、恐怖におびえた声で、嘆き悲しむ声で――それは懺悔の言葉であつた。

「……まず、結論から申し上げておきますと、あなたのお父上――神埼庄三郎氏の研究は全面的に正しかった。私はあなた

のお父上が記していた方法で別世界へと通じる扉を開けることに成功し、その世界を覗き見る事ができたのです。ああ、そこは想像を絶する世界でした。言葉では言い表すことができない――それこそ、言葉とする語彙さえ見つからないような、脅威と狂気に満ちた場所だったのです。空は恐ろしいほど深い紫色に染まっており、遠くに見える山々は血のような真紅の色合いをしており、流れる雲は想像を絶するような色と形をしており、そして、そして……もはやどのような表現すればいいのかわからないのですが、その世界には、不気味で、おぞましく、不定形な形をした、それこそ造物主が悪意だけを材料として創りあげたような恐ろしい怪物たちがひしめきあっていたのです。そこは私が想像していた世界とはまったく違う――それこそ地獄と形容することすら生ぬるいような、邪悪な世界がそこには広がっていたのです。そして、そして……これはもはや自業自得としか言いようがないのですが……私は自分がしたこの行いを後悔しています。こんなことをするんじゃないかと、と悔いているのです。なぜならば、連中は――あのバケモノどもは、気づいてしまったからです。私の存在を――私の後ろにある、この世界の存在を！　ああ、神よ、どうか許したまえ。そして、どうか慈悲を！　どうか、どうか、どうか、犠牲となる者が私だけで済みますように！　どうか！　ああ、目が見える……爛々と輝く赤い目が見える！　もの凄い数の赤い目がこちらを見ている！　鋭い爪が、牙が！　ああ、神よ！　お願いだから、どうか、どうか……！！」



その後、受話器の向こう側で絶叫が聞こえたかと思うと、電話はプツツリと切れてしまい、それっきりであった。池田ひふみがその後、どうなってしまったのか、知る者はもはやいない。

……このしばらく後、世界各地では、恐ろしくおぞましい姿をした、形容し難いバケモノどもが頻繁に目撃されるようになるのだが、それはまた別の話である……。

完